



史料室だより

清泉女子大学史料室 Seisen University Archives

No.27

昭和初期から令和へ

～歴代学長が愛用した大机～



史料室展示室に、新たな歴史の証人が加わりました！

長年、本館1階の学長室で実際に使用されてきた「歴代学長の大机」です。

この机には、大学の歩みだけでなく、それ以前の激動の歴史も刻まれています。

焼き印の解読で明かされた「歴史の謎」

机の右袖側面には、うっすらと焼き印が残されています。

AIの力を借りて文字の分析を行ったところ、この焼き印の文字と意味が解明されました！

- 焼き印の文字：「空廠科風 九ー二」（くうしょうかふう きゅうーに）
- 「空廠」：飛行機や関連装備の研究・製造を行う「航空廠（こうくうしょう）」の略称
- 「科風」：航空機の開発に不可欠な「風洞科（風力試験を行う部署）」を指す可能性が高い
- 「九ー二」：備品整理番号

つまりこの机は、戦前～戦時中に陸・海軍の航空技術開発の現場（風洞実験室など）で使われていた大変貴重な官設の備品だったのです。



シスター エルネスティナ・ラマリョの熱意と、戦後からの再出発

終戦後、旧軍の備品はGHQによる解体・接収を経て、教育機関などへ払い下げられることになりました。

当時、大蔵省からの払い下げ情報を入手するやいなや、自ら率先してこうした机をもらいに出かけたのが、その頃、聖心侍女修道会の修道院長だったシスター エルネスティナ・ラマリヨ（本学第2代学長）でした（シスター 中村玲子 談）。

本学は横須賀の「海軍工機学校」跡地の建物を利用して開学しましたが、この大机は戦前の技術開発の現場から、シスターたちの熱い思いによって受け継がれ、長年「学長机」として本学の歩みを見守り続けてきたのです。

職人の手仕事

この机は左右の両袖の上に天板を「ただ載せるだけ」という、釘や金具を使わない伝統的な構造をしています。

細やかな仕切りがある引き出しや装飾性の高い木製把手など、当時の職人による丁寧な手仕事が光ります。

金具を使わない、職人の手仕事



天板



左袖



右袖



引き出し内部の仕切り



木製の把手

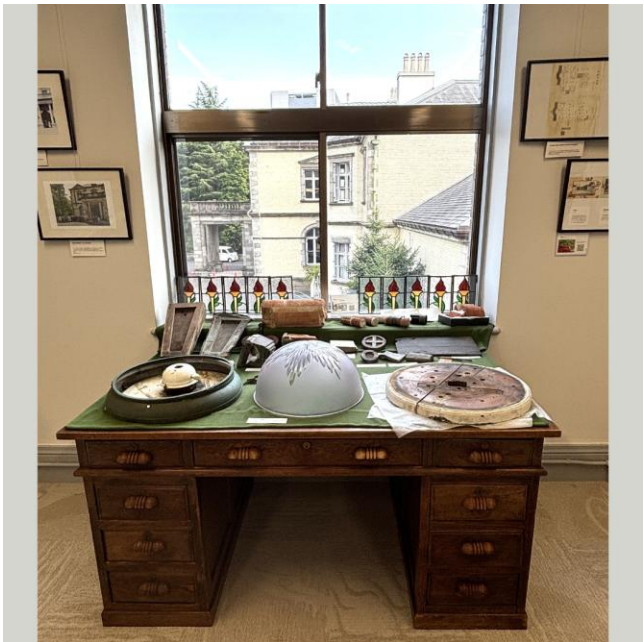


下側から見た把手

史料室で展示中

現在は史料室の南側窓辺で、本館車寄せの照明器具を引き立てる展示台として第二の人生（机生？）を歩んでいます。

ご来室の際は、ぜひ天板の質感や細部の職人技、そして2つの時代を生き抜いてきた側面の「焼き印」にも注目してみてください。



＊ ＊ ＊

「史料室だより」は清泉女子大学公式インスタグラムにて連載中です。